


第12回大学教育研究フォーラム ラウンドテーブル企画
「遠隔授業を通して見えてきた大学教育の未来」
2008.3.28@京都大学吉田南1号館

話題提供3

**共時的・通時的視点から捉えた学びの変容過程：
ボトムアップ的教育論の組織化に向けて**

山田 剛史 (Tsuyoshi Yamada)
京都大学高等教育開発推進センター
t:yamada@z05.mbox.media.kyoto-u.ac.jp



問題と目的①

- 「学び」をめぐる2つの次元
- 1. 現象レベル
「学び」は「今、ここ」で起こっている！（現在→未来）
- 2. (学生の)主観レベル
「学び」は事後解釈的に意味づけられる！（未来→過去）

どっちが大事？

Table 「学び」をめぐる研究の視点と方法

	学び	研究視点	研究方法
現象レベル	生成的	外在的/通時的 (教員>学生)	・フィールドワーク・・・研究量少 ・資料解析(ログ解析等)・・・研究量多
主観レベル	物語論的	内在的/共時的 (教員<学生)	・インタビュー(内在的)・・・研究量少 ・アンケート(外在的)・・・研究量多

→どちらも大事！本報告では、フィールドを記録した**ビデオデータ**と、授業後行った**インタビューデータ**とを付き合わせることを通じて「学び」について考究する。

問題と目的②

- 授業の「**転機**(turning point)」という視点
通常、教員は授業の中で問題が起きないよう万全の準備を行う
↓しかし・・・
「記憶」の観点から見ても、印象的な出来事は保持されやすい
「発達」的観点から見ても、人が変わる際には転機が重要な役割を果たす
↓ゆえに・・・
授業を「**学び**という自己形成の場」として考えたとき、授業の「**転機**」という枠組みは有効ではないか？
- 本報告の目的
「**転機**」をめぐる“通時的(外在的)視点”と“共時的(内在的)視点”とを付き合わせ、その異同に着目し、ボトムアップ的に重要なファクターを抽出する。そして、大学教育における「**学び**」の在り方について議論を展開することを本報告の目的とする。

分析対象と事例の選出

【分析対象】

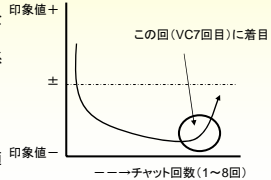
- ・ビデオをチャットの様子を撮影したビデオデータ
- ・授業後に行われたインタビューデータ
- いずれも、「**転機**」として語られた場面を分析の対象とする。
- 該当するインタビューの質問内容は「第1回目の顔合わせから、最終の合同発表に至る一連のプロセスを物語として捉えたときに、あなたにとって**転機**あるいは**転換点**となった回・出来事・発言はどのようなものでしたか？」であった。

【事例の選出】

- ・担当したインタビューの内、京大側構成員の全て(3人)が同じ回(ビデオチャット7回目・右図)の同じ出来事(鳴教側の現職教員との対立関係の克服)を**転機**として捉えた班を対象とする。

選出理由

- ・他班に比べその変化が劇的であったこと
- ・故に、**転機**という視点から学びを考える際の適材と考えたため



Step1: インタビュー (京大Cさんの語り)

変化前の継続的対立構造(説明)
ビデオチャット1回目より、転機が訪れる7回目まで「**教師**(鳴教大) vs. **生徒**(京大)」の構造(硬直状態)が続いていた。

転機の語り
(前略)7回目やったと思うんですけど、その〇〇さん(鳴教大E)と、喧嘩って言ったらおかしいけど、**がって**言って、で、**壁が外れたとき**があったじゃないですか、そんなときが、やっぱり大きな**転換点**だったと思うんですね。

発言のきっかけに関する語り
(前略)きっかけは〇〇さん(京大B)の**発言**やったかな、(中略)あなたは現場現場っていうけど、そうじゃない所もあるでしょみたいな話を、今までずっと言えなかった話をぼんと言って、当然のように〇〇さん(鳴教大E)はその上からがーとまた言ったけど、(中略)その**10分**かはすごい**せめぎ合い**だったと思うんですけど、でも、とうとう折れてくれて・・・

その後の変化に関する語り
(前略)〇〇さん(鳴教大E)が、自分が子供、自分が生徒だったときの、**経験**を教えてくださいみたいなこと言ったんですけど、(中略)即座に、じゃ、〇〇さん(鳴教大E)は生徒だったときどういう先生がよかったですかっていうことを聞き返したんですけど、

(前略)初めて、**生徒の立場**としての〇〇さん(鳴教大E)っていうか、見た感じ・・・**現場を出すのに控え**めになった・・・**提案**みたいな感じ・・・あたしたちの方が、現場の話が聞きたいなと思って、**自ら聞く**っていう機会ができた・・・

Step2: ビデオ

では、実際にインタビューで語られた**転機**の場面に該当するビデオデータを見てもらいます(一瞬ですが・・・)。
先のトランスクリプトとどのような違いが見えてくるでしょうか？

1. 転機をめぐる一連のやりとり
[knv no.1.mov](#)
2. 更なる変化への土台作り(「体験談」を契機として)
[knv no.2.mov](#)
3. 何が変わったか？
[knv no.3.mov](#)
4. 更なる議論への展開
[knv no.4.mov](#)

Step3: 摺り合わせ

• インタビューから抽出されたこと

- a. 硬直状態(上下関係)の解体
- b. 共変関係(変化の双方向性)が見られた(鳴教側)「講釈(防衛)」→「提案」(京大側)「反発(防衛)」→「自発的な質問」
- c. 体験談という素材の効果「平等性」の確保(教育に対する経験の有無からの解放)

内容は比較的整然としていて(静的、肯定的方向へと主観的体制化(物語化)がなされている。

• ビデオチャットから抽出されたこと

- a. 画面上へのin/out
- b. 言語的・非言語的コミュニケーション(ex. うなずき)
- c. 話し方・声の質の変化(ex. 同調的会話、笑顔)
- d. 会話のスムーズな流れ(ex. 質疑応答がスムーズに、会話を遮らない)

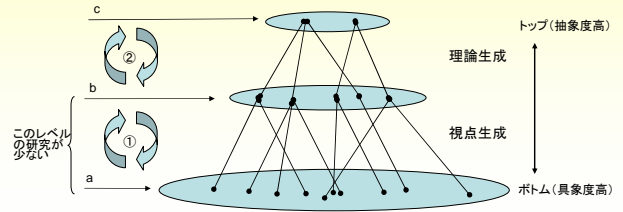
大まかな流れはインタビューと同じだが、語りでは表現し得ない変化を捉える様々な指標が埋め込まれている。

* 通常、メディアを介した研究では、ログや質問紙、インタビューなど記述化されたデータが用いられる。しかし、両方法から得られるデータは相補完的なものであり、彼らが記述する(語る)ものとなっている授業(経験)を付き合わせていくことで、より深みのある授業研究が可能となるのではないだろうか。

Step3.5: 授業研究の視点

• もうワンステップ必要!

- Step1からStep3では、転機をめぐるインタビューデータとビデオデータから、その変化のプロセス・力動を捉える試みを行ってきた(一次構成; 下図①)。
- 転機によって変化は確かに生じた。が、これは一体何なのか? 単に関係性が変わっただけなのか? それとも彼らは「学んで」いるのか?
- 学んでいるのだとすれば、ここでの「学び」とは一体どのような性質のもので、従来の学びの中でどのように位置づけられるものなのか?
- 故に、もう一段上位の検討を行わなければならない(二次構成; 下図②)。



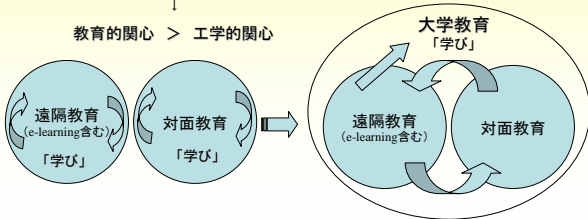
Step4: 「学び」の観点から再考①

- 通常、メディアを介した授業の評価は、「システム評価(音声や画質、利用のしやすさなど)」であることが多い。教育的観点といっても、「満足度評価」であることが多い。

教育的関心 < 工学的関心

- 大学の多様化、教育方法の多様化、メディアによる日常性の変容等を考えると、外在的視点による画一的な「学び(学習)」とは異なる、alternativeとしての「学び」について考えねばならない時が来ているのではないだろうか? (cf. 渡部, 2005)

教育的関心 > 工学的関心



Step4: 「学び」の観点から再考②

大学審議会答申(2000.11)において、グローバル時代の教養に求められる能力として、次のような5つの能力が挙げられている。→本実践では?

- ①高い倫理性と責任感:
「匿名性」が通用しない状況下での授業、授業外での打ち合わせ等の活動が求められた授業、であることから高い責任感が形成される。また、「教育」という問題を議論する中で部分的にはあるが倫理性の形成にも寄与する。
- ②文化に対する理解:
京大(学部生/教育学部/学問志向)と鳴教大(院生/現職教員/実学志向)といった文化差が予め想定されている。学生はそうした文化差を感じながら、そのズレを修正したりしていく。その過程において異文化に対する理解が深まっていく。
- ③コミュニケーション能力:
最も高い効果が得られた能力である。本授業の媒体は性質の差異こそあれ、すべて「コミュニケーション」を基軸としている。対面環境と比べ情報量の制約を痛感する中で、相手との生産的な議論のために、音段以上にコミュニケーションの在り方に細心の注意を要する。
- ④情報リテラシー:
実は意外と高いとは言えない。結局の所、スタッフが事前準備をし、問題点などあれば適宜修正する。故に、学生自身がどの程度情報リテラシーを形成できたかは課題が残る。
- ⑤科学リテラシー:
この点については、ほぼ皆無である。

Step5: 大学教育へのパースペクティブ

1. メディアは「ツール(道具としてのメディア)」ではなく、身体の一部として構成され得る「環境(環境としてのメディア; cf. 美濃, 2004)」として考えなければならない。

→ビデオデータからも、彼らは画面のon/offを切り替えながら、相手との「パーソナルスペース」を調整したりしている。

→故に、e-Learningの本質的な欠点を「身体性」の欠如に帰属させる批判(cf. Dreyfus, 2001)は、必ずしも適当ではない。

2. 広い意味で環境メディアとして捉え遠隔教育(→大学教育)を考えていく際に、メディアの性能如何は必然的条件(本質的問題)ではない。

→彼らは、「埋め込まれた環境」の中で、いかに議論する上で相手との距離をとればいいのか? を模索している。

→「限定がかかっている」故に、相手に伝えようとするための術を一生懸命考えるし、普段見えにくい「ノンバーバルコミュニケーション」の重要性への気づきが促される。

* 故に、遠隔教育 vs. 対面教育といった対立構造や棲み分け構造は、もう一段上の大学教育という見地からは無効化される。

以上です。

ご静聴ありがとうございました。